引き揚げ者の総数は、７１５名前後で殆ど婦女子であった。その他軍人も約２００名程、乗船していた。

１２日出港予定が、近海での米潜水艦出没の情報等により、「翌日に、延期になった。」と、誰いうことなく囁かれていた。

１９年に入ると引き揚げは、毎日のようにあったが、「潜水艦の攻撃を受け、沈没した輸送船もある。」との噂も流されていた。しかし、真意の程は分からなかった。そんな危険な状況の中、第何次かの引き揚げであった。

一夜をパラオ港内の船内で明かし、翌１３日午後４時頃輸送船２隻（もう一隻は古い船でジョクジャ丸、その他護衛の駆潜艇１隻、特務駆潜艇２隻、どちらも潜水艦攻撃用爆雷発射装置並びに砲と機銃を装備していた。これら、５隻の船団でパラオ港を出港した。

１３日の夜は、特に変わったこともなく穏やかな航海であった。見張りは、敵潜水艦の早期発見のため厳重を極め、船の各所に見張り員が配置されていたようであった。

私達引き揚げ者が乗っていた場所は、最後部の船倉を「カイコ棚」に区切り、それぞれの家族単位の班毎に、一区画にかたまっていた。私の家族も親戚を含め９名が同じ所に集まって身体を横たえていたが、人いきれや船独特の匂いと、何時攻撃を受けるかわからないといった先行きの不安とで、中々寝付かれない状態であった。

私も眠れないまま夜半頃まで甲板に出て、パ中同期の親友である吉岡君（現在尼崎市在住）と今後の事等について語り合っていた、夜半過ぎ頃、家族の居るところに戻り眠りに就いた。昼間の疲れがでたのか何時の間にか寝付いたようであった。

夜明け前の午前２時２１分頃、敵潜水艦による魚雷の「雷跡発見！」との甲板上からの叫び声に慌てて飛び起き急いで船倉上の甲板に上がり、付近の人の指差する方向を見ると、うすぼんやりとした雷跡と思われる白い３本の筋が、ほの暗い海中を夜光虫の泡を立てながら、本船に向かって、もの凄いスピードで走ってくるのが見えた。

本船は回避運動する間も無く、３本共、船に直進してきたので、「もうやられた。」と思った瞬間、魚雷は船底をくぐり彼方へと去って行った。ほっと胸を撫で下ろしたのもほんの一瞬の事であった。

吉岡君や２～３名の同級生も、近くに居たように思う。駆潜艇等が捜索したようであるが成果のほどは知る由もなかった。

それから、およそ３時間半後の午前５時５２分頃、夜の明染める水平線より、魚雷の雷跡が突進してくるのが見えた。

第二回目の攻撃である。大胆不敵というか、近海は我がものといったような攻撃の仕方であった。それは、小型のモーターボートを見るように海面上を突進してきた。先程の３本はある程度の深度をもって発射されてきたが、今度のは前列３本、後列３本内１本は、深度「零」といった状態であった。

本船は、回避行動をしたようであるが、それも間に合わず、引き揚げ者のいた、船倉付近の右舷船尾に「ガーン」と轟音と共に命中、私は船倉の入り口近くの船倉蓋板と共に吹き飛ばされ、以後しばらくの間気を失っていた。

「ハッ！」と気が付いて「生きていた」怪我は？と、付近や自分の身体を見回した。

飛ばされて落ちた場所は、荷投に使う起重機の近くで、怪我は右足首に残さ２センチ程の裂傷があり、左足大腿部付近から落ちたようで、その付近に鈍痛があったが、その外に

負傷もなく、怪我も打ち身もたいしたことはなく、動くには差し支えなかった。

動けると思ったとたん、すぐ「家族は？　父や弟妹は？」と、思いながら船倉を見た。そこは、地獄の惨状さながらで、船倉には半分以上海水が、魚雷の爆破口より入り、死体が浮き生きている人々が必死に助けを求め、阿鼻叫喚の修羅場であった。

その中に『チラット』父の顔が、水面に浮いて見えた。その瞬間、助けにいかねばと思いながら、その生死を確かめに船倉の中に飛び込んで行く勇気も気力もなかった。

それ以後、今まで、ずっと子として、何故、その時飛び込んで見にいけなかったのかと後悔の念に苛まれている。父の顔は束の間うちに、ドンドン浸水してくる水中に没して行った。弟妹や親戚の人は、残念ながら一人として見当たらなかった。

船倉の中は、死んだ人，助けを求める人，その他爆発で飛び散った木片等が、水面一杯に浮いていた。自分の思考というものが全く失われ、茫然として、なすすべを知らずといったような、状態ではなかったかと今にして思っている。

家族が、皆死んだのではないかといったような悲しみは、その時は湧いてこなかった。その間、僅かな時間が過ぎたように思う。すぐそばで、吉岡君の声がした。

「家の人は、どうした。生きている人を引き上げよう。」の言葉に、ハッと我にかえり「家族は、皆死んだらしい。」と答え、二人で腰に下げていた命綱を使い、船倉より一人づつ引き上げた。何人を助けたのか、覚えがない。

殆どが婦女子であり、怪我をしていた人、既に溺れて死んでいた者が多かった。引き上げている間は夢中であった。その間にも『ドンドン』と浸水し足元まで海水が洗うようになっていた。

時間にしたら被雷してから２０分そこそこではなかったろうか、船も右舷に傾き始めていた。もうこれまでと、吉岡君の『飛び込もう』の声で、２人共付近にあった救命胴衣を着け海中へ飛び込んだ。

遠く近くに潜水艦攻撃のための駆潜艇から投下する爆雷の爆発音が聞こえていた。

沈没の瞬間に起こる渦のために、身体が水中に引き込まれると聞いていたので、少しでも速く遠くに泳がなければと思いながら、気は焦ったが救命胴衣を装着しているせもあって、泳ぎには自信があったはずなのに、自分の身体が全く船から離れず少しも前に進まない。

救命胴衣をはずそうとしたが、水に濡れた結び目は、慌てて結んだせいもあって、どうしても外れてくれない。

その間にも「美山丸」は、刻一刻と沈んでいく。付近に浮いていた板に掴まり、半ば観念しかけていた。特に、その時は、死の恐怖はなかったように思う。

私が付いてこないので、前を泳いでいた吉岡君が『オーイ！速く泳いでこんか！』と、怒鳴るのが聞こえた。『救命胴衣が邪魔になって泳げないんだ。』と答えると『船が沈んでしまうぞ』と言いながら引き返してきて、近くの救命艇まで引っ張ってくれ、救助された。

その夜、もう一隻の輸送船である「ジョクジャ丸？』に乗り移った。『やっと助かった』という気持ちと、『もしや、弟妹達が、何処かで助けられているのでは、』との思いで、救助された人達の間を捜し廻った。

私たちが救助された午前８時４７分頃、美山丸は船首を天空に向け船尾より白い渦を水

面に、渦を泡立たせながら沈んで行った。ジョクジャ丸は、汽笛を鳴らし沈んでいく船と一緒に沈む人々の霊を弔らった。魚雷に当たってより、約３時間後に沈んだとのことであった。

弟妹達を捜しているうちに、横たわった数体の遺体の中に弟を捜し当てた。傷らしいものはなく、頭を強く打ったような痕跡が見られたが、既にこと切れていた。きっと、爆発の衝撃で飛ばされ打ち所が悪かったのか、気絶しているうちに溺れ死んだのか知る術もなかった。弟はその時僅か９才でした。（父４９才、妹１５才）弟の苦痛も見られない、死に顔を見ながら初めて悲しみがこみ上げ、涙が頬を伝わった。

その日の夕暮れに死者の水葬が行われた。綺麗なキャンパスに一人一人しっかり包まれた日の丸の旗に覆われて、錘りを着け海中に投下する。何とも言い様のない葬儀であった。弟の遺髪と爪を切り大事に仕舞った。

吉岡君や同期の何人かが、立ち会ってくれ励ましてくれたが、悲しさは隠しようもなかった。父と妹、それから親戚の人達は、遂に見つからなかった。

たった一人で生き残った、小さな子どももいた。

一回目の遭難で亡くなった人達は１００人近くいたとのことであるが確かな数字は記憶に無い。

一隻になったジョクジャ丸は遭難者を収容すると、３隻の駆潜艇に守られ昼過ぎ頃、動きだした。

進路はフィリピンの方向とも台湾の方向とも囁かれていたが知る由もなかった。敵潜水艦もやっつけたとも逃げたとも言われ、此れもはっきりしなかった。

船が動きだしてから、私たちパ中同期生は、家族同伴者を除き４名が船橋付近の船倉上蓋上に集まり、遭難時のこと、きっと予科練に入り仇きを取ろうなどと語り合い、私を励ましてくれたが私自身が気が滅入って口数は少なかった。

夕食に配られた握り飯を食べて一息入れる頃、南海の陽が落ち暗さが濃くなるにつれて、朝からの疲れが一度に出たのか周囲も静になり、我々も何時しか眠りに陥った。

私も眠れないまま、夜半近くまでウトウトしていたが、何時の間にか寝就いたようであった。敵潜水艦に対する見張りは一層厳重になっていたのは当然であった。

眠り就いてどのくらいたったろうか、突然「ドカーン」という轟音と共に身体は空中に飛ばされていた。

どのくらいの時間が過ぎたか知らないが、気が付くと船橋に連なる壁と船倉の間の２メートルそこそこの空間の甲板に置いてあった、半分程度、水の入った水槽に落ちズブ濡れであった。辺りは、まだ暗く身体は怪我もなく無事であった。もし、船倉の中に落ちていたら、恐らく助からなかったのではないだろうか。

又もや、敵潜水艦にやられたのである。

駆潜艇の護衛や厳重な見張りだけでは、どうにもならなかったのだろうか。不幸中の幸というか、当たりが良かったのか、轟沈は逃れたようだが機関（エンジン）は既に止まっていて、私たちがいた近くの船倉の右舷付近がやられたようで、その辺から、浸水しているように思われた。

その辺の海水の流れがあったように見えた、又、薄明るくなってみたらその辺には破口があった。そして、あの火薬独特の硝煙の臭いが立ち込めていた。私の落ちた廻り、つま

り、被雷直前まで皆でいた付近を見渡したが、同級生は誰一人見あたらず、もしやと不安に駆られながら一人一人の名前を呼んでみたが返事はなかった。

後になって聞いたが、被雷したのは５月１５日午前３時１４分とのことだった。

引揚げ者の人達は、一回目の遭難の教訓を生かし誰も船倉のなかには入らず、廻りの甲板にいたようであったが、死者こそ少なかったものの怪我人は出た模様で、あちこちで叫び声やうめき声が聞こえ、自分の家族の名前を呼び合う声が悲痛に聞こえてきた。

友の名前を呼びながら、船倉の廻りの甲板を後部の方に歩いて行くと、丁度、私が落ちたところより反対側の船倉と船倉の間の起重機の付近から「伊佐君、此処だ！」と叫ぶ声が聞こえた。

近づくと同級生で、最も熱烈な予科練志望者である「平良光正君」がそこにいた。彼は単身引き揚げた一人だが、昨日来行動を共にして、昨夜も同じ場所に居た。それが何故こんな所まで飛ばされているのか咄嗟に判断もつきかねたが、それを考えている余裕もなく、「大丈夫か？」と聞くと、「やられたらしい」と言いながら、立とうとすると、「フニヤッ」とするような感じで座り込んでしまう。星明かりでよく見ると右足首より上方の「スネ」を怪我しているよう　で、血が大分流れて足首の先がやや後方に向いていた。骨が完全に折れ砕けて傷口より見えていた。本人は痛みも感じないのか、２～３度立とうとしては座り込んでしまう。それを押し止めすぐに足首を前に向け着ていたシャツを破って、大腿部付け根の動脈付近をきつく縛り止血する。近くから木切れを探し、当木をして応急処置を終わる。処置をしている間も終わってからも、彼は繰り返し「足の傷は治るだろうか、予科練の試験は受けられるだろうか。」との言葉であった。勿論、素人の私に医学的な先の見通しがわかる筈もなく、只「絶対に治る。大丈夫だ。」と元気付けるより言うすべもなかった。特に、苦痛を訴える事もない友を励まし、背負い、泣き叫びながら助けを求めて、救助のため「ジョクジャ丸」に近づく救命ボートに、我先に乗り移ろうとする他の遭難者と共に、ボートの来る舷側に急いだ。「怪我人から先に乗るように！」と言うボートの乗組員の言葉に、怪我人から先に乗り移しだした。

私も廻りの人達に「大怪我をしているので、先にお願いします。」と、断りながら、人垣を別けて舷側に辿り着き、平良君を降ろして付添いとして、私もボートに乗り移った。

ボートには、蒸気のために全身火傷をした男の人や、怪我人その他の人が救助されていた。

２０人近く救助し満船状態になると、救命ボートは近くの、特務駆潜艇に横付けになり、遭難者は皆それに移乗した。

直ぐに衛生兵（軍医は乗っていなかった。）らしい人に診てもらい、傷薬をつけて簡単な治療をし、包帯をしてもらった後、衛生兵の方より、傷がひどいので軍医のいる駆潜艇に乗り移るように言われた。

その間、最初はあまり痛みを訴えることもしなかった平良君も、足を動かす度に、苦痛に顔を歪めたが、声は漏らさなかった。

日頃から運動神経抜群で、気丈な彼らしい一面であった。付き添いながら、心のなかでは、さぞ痛かろうにと思いつつも、言葉では「我慢しろ、気をしっかりもって頑張れ。」と再三、励ました。

そんな状態の中、夜は明け始め水平線より陽が昇る頃、まだジョクジャ丸よりの救助が

続き、ジョクジャ丸は、やや沈んでいたが、まだ完全に近い状態で浮いていた。

先に沈んだ「美山丸」はいわゆる船標船といわれ、溶接技術がそう発達していなかった頃の戦時中に溶接による急造輸送船で、割合脆かったのに比べ「ジョクジャ丸」は外国にて建造された鋲打ち船のため、被爆しても頑丈で急所が外れたら、一部の浸水だけで沈没しないとのことであった。

昼前頃、駆潜艇に乗り移り軍医の手当を受けた。

軍医さんは眼鏡を掛けた優しそうな方で「大丈夫、足はきっと治る。」と言ってくれ、治療して下さった。

治療も終わって、私は、甲板に出たが、そこは、足の踏み場のないほど救助された遭難者で溢れていた。

私は、船の舷側の僅かな空間に、足を外舷に垂らし腰を下ろした。足下を波が洗っていた。駆潜艇は、索敵をしながら走り出していた。

翌々日の５月１７日午後１時頃、フィリピンのセブ島に着いた。

セブ島に着くと岸壁には、先に救助され特務駆潜艇で先着していた人々が迎えに立って居た。その中に、吉岡君の姿があった。「オーイ！生きていたか。」どちらともなく言い合い、上陸して再会を喜びあった。

直ぐに、平良君の負傷と此れ迄の経過を話した。

吉岡君は、被爆時、私と同様爆発の衝撃で飛ばされたが、運良くボートデッキに落ち、幸い負傷もせず、丁度、降下しようとしていたボートに乗り救助され特務駆潜艇に移乗後、そのままセブ島に先着したとのことであった。又、その他の同期生も、それぞれの駆潜艇に救助され分乗して、平良君の負傷を除いては、全員無事にセブ島に着いたことが追々判明した。

早速、決められた収容所に、引き揚げ者全員が収容され、一息つき『ホッ！」とした。上陸したときは２回の遭難で、服は殆どボロボロになり、顔は真黒で、まるで乞食同様の格好であった。

怪我人は近くの病院に収容され、治療を受ける事になった。収容所に入って被服や履物等の支給を受け、握り飯を貰って食べ、やっと人心地がついた。

収容所に入ってから２～３日たって、働ける若い人は、引き揚げ者全体の世話の役を引受け、炊事やその他の雑用に当たり、私達中学生とその他の若い人２～３名は、海軍の烹炊所の作業に従事した。

引き揚げ者の団体構成は、団長の他に世話の役員が数名いて、色々と皆の世話や軍やその外の機関との連絡等に当たっていたようでしたが、はっきりとしたことは覚えていない。

平良君の足の傷は、思ったより経過が良く、元気に話もするようになった。

セブ島の半月余りの生活は、あっという間に過ぎ、どういう事情であったかよく分からないが、マニラに移動することになった。

６月の始めの頃、マニラに移り、学校であった建物に収容され、傷病人も共に移った。そして、日本への引き揚げまで此処で過ごすようになった。

引き揚げ者は、２回の遭難で約１００名前後の人が亡くなり、残り２００名余りの人がマニラで待機することになった。

食料は、公的機関より支給され、自分達で炊事を行い、全員の握り飯を握って一人２個

当たり配給していた。「おかず」は、漬物等が多かったように思う。食器もなかったので、そのような食事になったのではなかったろうか。私たち中学生も毎日握り飯を握ったお陰で、上手になったのを覚えている。

マニラに来てしばらく経った頃より、平良君の足の状態が悪化し、破傷風の症状を起こし、下肢部が化膿、何回かの切開手術をしていたが、経過は思わしくなく、6月下旬頃には、膝から下を切断手術しなければ命にかかわるということで、医者より本人を説得するように言われ吉岡君と二人で一日がかりで説得した。

友は、『足を切ると予科練に行けない。』と言い張って、涙を流して反対した。私どもも共に泣いたが、命に拘わることだからと、宥めつつ叱りつして、やっと切断に同意させ、手術は6月30日頃と決まった。

私自身、遭難以後死んだ家族のことを思い眠れない夜、彼も一人で涙を流し、きっと、予科練に入って仇を討たなければならないという決意と悲しみとで自分を叱ったりするうち、日々は過ぎて行った。

平良君の手術をする前日頃、引き揚げ者は内地に帰るべく、再度輸送船に乗り、マニラを出港した。

平良君の付添いで残らなければならない状況であったが、幸い知り合いの看護婦さんが付き添ってくださることになり、その方に後事を托し、再会を約束して、平良君の分まで早く予科練に入ることを固く誓ってマニラで別れた。

途中の航海は、潜水艦及び敵機の攻撃の危険に晒されながら、どうにか無事に、7月の初め頃、台湾の高雄港に着いた。

航海中、時化や雨の日もあったが皆一人として船倉に入るものはなかった。もし、入っていて潜水艦にやられたら、死を意味していたからであろう。二度もの遭難の教訓が、然らしむる所であった。

台湾では、沖縄への引き揚げ者80名余りが上陸することになり、残りは、又、台湾まで来た輸送船で内地まで引き揚げることになった。

沖縄へ帰る人達は、戦況悪化のため、終戦まで台湾で過ごすことになるが、もし、その頃帰っていたら、沖縄玉砕の悲劇に巻き込まれていたかもしれない。

私も生地である、沖縄の宮古島に一応帰るため、沖縄へ引き揚げる人達と一緒に台湾に上陸した。

吉岡君は、大阪の親戚を頼りに、そこで予科練の試験を受けるということで、台湾で別れることになった。彼も、予科練志願のためパラオの家族と別れ単独で帰って来た一人である。故郷の奄美大島には、終戦後帰った。

台湾上陸後、連日のように空襲があり、戦況の逼迫を感じさせた。私共引き揚げ者は、高雄市内の旅館のような建物一棟に収容され衣食等は役所の世話や寄付等で支給され満足とは言えないものの割合良かったと記憶している。

私は、ほかの数少ない若い人達とともに団体の世話をしていて、食料の買いだし、官公庁への連絡等で毎日を過ごした。

高雄市内に収容されてから3カ月後の10月初旬頃、平良君がマニラから台湾の病院にきているとの連絡があり、早速高雄病院に飛んで行き3カ月ぶりに再会し、無事を喜びあった。

足は、膝から下を切断されていたが経過は良く、傷は殆ど治っていて、もう少し治療すれば退院も可能とのことで、ホッとした。何よりにも増して彼らしい快活さを取り戻し元気なのが救いであった。

彼らの船は、マニラから台湾に向かう途中、台湾の手前で空襲を受け、火災を起こし、海に飛び込んで、片足でしばらく泳ぎ、助けられたとのことであった。３度目の遭難である。「カッパ」みたいな友であったが、片足で良く泳いだものだと驚嘆した。

平良君がまだ入院中、引き揚げ者は空襲が激しくなるにつれ高雄市内は危険となってきたので屏東州義山という町に疎開することになり、その小さな町に移ったのは、昭和１９年１１月頃であった。

私は、事情があって一時引き揚げ者の団体よりはなれ、台北の中学校に入り、そこで20年６月まで勉強させてもらい、その間の３月に、憧れの予科練甲飛の試験を受けたが二次適性検査で落ち、初期の目的を達することは出来なかった。

６月始め頃、第一線となっていた台湾でも中学校高学年は、軍隊に編入された。

私もその頃、警備召集の名目で陸軍に入隊、僅かな初年兵教育後、部隊名等は記憶にないが、台北飛行場の警備隊に配属され、約一ケ月後終戦を迎え、８月２０日頃、台北飛行場で除隊となる。

昭和１９年の末頃（私が台北にいる頃）、平良君は退院、引き揚げ者の団体の所で過ごしていたが、私が除隊後、再び引き揚げ者の団体の所に戻った頃には、栄養失調とマラリヤのために、瀕死の床にあり日を待たずして病没した。昭和２０年９月頃だった。ろくに医者にもみて貰えず、親や親戚の人にも看とられず寂しく死んで行った。何回もの遭難、しかも、片足を切断してまで生き延びた命だが、故郷もみないままに終わったのである。１７才の短い儚い生涯であった。

引き揚げ者は、病死事故死等何人かの犠牲者を出したが、昭和２１年２月頃、戦禍の跡の沖縄へと引き揚げた。

昭和５４年３月記す　　伊佐　勇蔵

淋しそうに去っていった兄を偲んで

上　間　幸　弘（５４）

軍国主義教育でたたきこまれた国民の思想信条は、恐ろしいほど徹底されていた。若者たちをはじめとする国民の殆んどはお国のために役立たねば、と誓い合い、行動するようになっていた。私の兄も、このような考えに洩れず、軍事徴用に、自ら進んで希望したのである。多くの中から選ばれたのだ。ともてはやされ、うらやましがられ、喜んだものである。

昭和十七年三月、学校を卒業するや、川西航空製作所の飛行機製作の仕事に従事することとなった。やっと満十四歳になったばかりで、まだまだ幼さが残り、何となく両親に甘えていたいような年頃であった。出発の朝早く、両親をはじめとする家族の前に膝まずき、「お国のためです。頑張ってきます。」と、言葉少なに挨拶をした。笑顔をつくろい乍ら